

ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212-108 について

庄垣内 正弘

はしがき

A. Stein によって敦煌の千仏洞より将来されたこのウイグル語写本は、現在 Or. 8212-108 の番号を付せられて大英博物館に所蔵されている。本写本は38葉からなる冊子本の体裁をとり、表紙表題は欠けているがそれ以外は大体完全な状態で保存されている⁽¹⁾。

cursive のウイグル文字で書かれたこの写本には十数編の仏教典籍が無造作に結合されているが、体裁上からそれらを識別することはむづかしい。しかし、この写本の約半分に相当する36ページに関しては、既に1965年に Reşid Rahmeti Arat が現代トルコ語に翻訳している⁽²⁾ので容易に内容を知ることができる。だが残りの33ページは今まで誰の手によっても研究されていない。この部分は写本の 2a~16b の30ページ、34a の1ページ、及び 37b~38a の2ページである⁽³⁾。

ここでは、最初の大部 2a~16b (これを I とする)、及び最後の2ページ (これを II とする) を対象として、解題、内容、言語について若干論述したい。なお、34a は漢語とウイグル語の混合文で書かれた興味深い断片であるが、ここでは扱わない。

以下に掲げるウイグル文は音素転写によって表示する。但し、音素記号//は本写本中の単語にかぎり適用する。

I

(1) 解題

Rahmeti の翻訳した部分は全て頭韻をふんだトルコ民族特有の韻文で書かれた、いくつかの小編の寄せ集めからできている。これに対して

この I の部は普通の散文で書かれていて、内容の一貫した完全な一仏典といえる（以下この I の部を本仏典とよぶ）。本仏典の冒頭は巻頭を表わす一文に始まっている。

ayayu aʔırlayı yökünür män 三宝 -lär qutıña ⁽⁴⁾ ∴ (2a-1)
 尊 敬 敬礼する(我れ) 三宝 などの 福へ

また、最後の部分は次のような奥書に終わっている。

V'BSU baʔsı yaratmıs 心 tözin uqıttaçı nom bitiyü tükädi
 師の 作成した 心性を 説く 法を 書き 終えた

sadu bolzun ∴ CYSUY' bitidim ∴ (16b-14 15)
 善哉 なれかし! が書いた(我れ)

さて、この奥書から本仏典が V'BSU 師によって作成された「心性を説く法」という題名の仏典であることがわかる。V'BSU は恐らく漢人名と思われるが実際の名称は発見できなかった。ただウイグル語において vap という形式は漢語の「法」の音形式を転写するのに、また so という形式は「蔵」を転写するのに使用されることから⁽⁶⁾、この人名を唐の「法蔵」に該当させることも可能である。しかし筆者の知るところでは法蔵の作品中に上記の題名をもつ仏典は存在しない。

一方、CYSUY' も同じく漢人名（智蔵□？）と考えられる。この人物は一見して V'BSU 師による原典の筆写人のごとくみえるが、彼は本写本中の別の仏典にも「CYSUY' tutuñ (都統)」として現われる（27-a）。そして、そこではある原典をトルコ風の韻文に翻訳あるいは翻案しているのである。それ故上掲の奥書にある「書いた(我れ)」というのも実は原典をウイグル語に翻訳（翻案？）したという意味に解釈すべきであろう。

また、筆者は、この仏典の作者が V'BSU という漢人名をもつこと、漢語仏典からの引用文がみられること、及び後述する言語上の特徴などから判断して、原典が漢語で書かれていたと推定したい。

本仏典がいつウイグル語に翻訳されたかを知ることはむづかしい。しかし書体や言語面での特徴から推定して10世紀以後であることは疑いない。また更にこの写本中にみられる特殊な2つの文字が Or. 8212-109 (1350年にチベット語からウイグル語訳されたタントラ)のもの⁽⁸⁾と一致することから、この写本の書かれた年代が14世紀半ばころと推定することも可能である⁽⁹⁾。

以上のごとく本仏典の解題は今のところ十分とはいえない。ところで

本仏典には題名の明らかな2種類の仏典からの引用がみられるが、これらが今後本仏典の素性を解明するのに役立つかと思えるので次に掲げた。

引用仏典の1つは首楞嚴經(/suruṅgamī-sudur/ skr. *śūraṅgama-sūtra*)である。これまでウイグル文仏典に首楞嚴經の名称の現われたことはない。ここに引用された文は大正藏經中の「大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經」の第4巻にその類似する箇所を見つけることができた。⁽¹⁰⁾しかしウイグル文の内容はこの漢語仏典のものと大きく食い違っているのでこの仏典から直接引用されたものとは考えられない。

täpři burxan suruṅgamī sudurta incä tip yarlıqamış ärür ananta
世尊 仏 は 首楞嚴 經で このように 宣うたのである 「阿難よ

śiravast baliqta yatıfadatı atlıṅ kişi tam üzä közüñü körüp közüñüni
室羅 城で 演若達多 という 人が 壁 の上の 鏡を 見たが、 鏡を

qodı qodmaqıntın öz başın körmämäk üzä başım yoq bolmıš turur
低く 置いたため 自分の頭が 見えないので 我が頭は 無くなって しまった

tip qal bolup öz başın tilägäli qayuta qayuta tanıp tiläp yoriyur
と、 狂気になって自分の頭を 探しに あちら こちら 探して 行く

ärkän bir ödtä qalı särilip kántü özi incä tip saqındı mänin özümñüñ
うち ある ときに 狂気が(醒めて) 彼自身 このように 考えた 我れ 自らの

başım yoq ärmis başımñı tilädäcisi kim ol tip ötürü qalı särildi
頭は 無くなった、 我が頭を 探すのは たれか と、 そこで 狂気が(醒めた)。

ananta bu yatıfadatı başın yoqlamış ödtä başı yoq boldı (mu) ärki
阿難よ この 演若達多が 頭を 無くした ときに 頭は 無く なった か」

anant incä tip kikinä birdi 世尊 -ä yoq bolmıšı yoq ärür tip yana
阿難は このように 答えた 「世尊よ 無くなったものはない 」と、 また

yarlıqadı ananta bu kişi başın tapmıš ödtä başın tapdı mu ärki tip
宣うた 「阿難よ この 人が 頭を 探した ときに 頭を 見つけた か」と、

anant ötünti täginmäz tägrim ol oq başı ärür adıntın tapmıš ärmäz
阿難は申し上げた 「世 尊よ その 頭は 在る 他から 見つけたのではない」

tip yana yarlıqadı uṅrayu adıntın baş tapsar aña baş bolur mu ärki
と、 また 宣うた 「意図して 他の 頭を 求めるなら彼の 頭と なる か」

tip anant ötünti täginmäz 世尊 tägrim adänniñ başı aña baş bolmaz
と、 阿難は申し上げた 「世 尊よ 彼の 頭は 彼の 頭と ならず」

tip bu nätäg ärsär 如是 yämä tınlaṅlar 心 yañılmaqıntın taštın sınar
と 「このように (如是) また 衆生は 心を 迷うことから 外 側に

burxan tiläyürlär qayu 時 -tä yañılmıš 心 amrılsar ol oq 心 burxan
仏を 求める、 いつの時にか 迷う 心が平静になるなら その 心が 仏

ärür adıntın bulur ärmäz ananta ol yañılmıš tınlaṅlar burxan tilämıš
なり、 他から 得るのではない、 阿難よ その 迷える 衆生 が 仏を 求めた

ödta 心 tigli burxan yoq boldı mu ärki täginmäz täñrim yoq bolmıŝı
時に 心 という 仏は 無く なった か」 「世 尊よ 無くなったものは

yoq tip 仏 bulmıŝ ödta qayutın ärsär kälđi mü ärki täginmäz täñrim
無い」と 「仏を得た 時に どこ から 来た か」 「世 尊よ

qayutın ärsär kälmiş ärmäz ol oq 心 burxan ärür tip ananta uñrayu
どこから 来たのでもない、 その 心が 仏 なり」と、 「阿難よ 意図して

adıntın burxan bulsar yämä aña burxan bolur mü täginmäz täñrim
他の 仏を 得て も 彼に 仏と なる か」 「世 尊よ

özi ök bu täñri yarlıñın tutsar öz köñülni tutup burxan yolın tilämıŝ
自身が この 世尊の意旨を 把握するなら自身の 心を 把握し 仏 道を 求めねば

kärgäk tuymıŝ tınlaylar incä tip sözläyürlär birök yatıadatı az qıa
ならない、 悟った 衆生は このように 述べている、 もし 演若達多が ちよっと

qataru yanıp közüñüni baqmıŝ ärsär başın ma yoqlamaz ärti qal
振り 返って 鏡を 見た なら 彼の頭 も 無くならなかった 狂気

yämä bolmaz ärti tip (3b-6~4b-4)
にも ならなかった」と

引用仏典のもう一種は華嚴經である。ウイグル文の華嚴經は既に羽田
亨、石浜純太郎の両博士によって若干の断片が発表されているが、何れ
も漢訳四十華嚴に対応するものである。しかしここに引用された華嚴經
は4例のうちその2例は明らかに漢訳八十華嚴と対応する。

padm(a)l(a)ñk(a)r sudurta tip yarlıqamıŝ ärür
華 嚴 經に(このように)と 説いたのである

yirtinécütä qayu barırca savlar ärsär 「世間所言論
「世間で どこへ 行くとも 言葉 は

alqu barca böldäci adirt aldaçı ärür 一切是分別
一 切 分 別 するもの なり

bolmaz bir yämä nom nom töziñä kirdäci 未曾有一法
1つのまた 法は 法 性へ入るもの(ならず)」

tip (9a-10~12) 得入於法性」(卷第十三66のC)
と、

padm(a)lañkar sudurta sözläyür
華 嚴 經で 述べている

nom tözi ilkitinbärü quruñ öcmiş ärür 「法性本空寂
「法 性は 本来 空で 寂滅したものなり

kördäci yoq ärip alñuluqı yämä yoq ärür 無取亦無見
見るものは 無 で 取るものも また 無 なり

tözi quruñ bolmaqı ol oq burxan ärür 性空即是仏
性が 空と なること それは 仏 なり

bolmaz saqınñalı ülgü(l)ägäli 不可得思量」
思 量すること(できず)」

tip (10a-6~8) (卷第十六 81のC)
と、

ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212-108 に ついて

庄垣内

第五十七卷

二六九

しかし、上掲の2文に対して次の引用文は漢訳華嚴經の八十、六十、四十何れの巻にもその完全な対応を示さない。ここでは比較的近いと思える四十巻本と対照してみた。

padm(a)lanḅ(a)r sudurta 華嚴經に	
ozmīs qutrurmīs atliḅ bodīs(a)t(a)v 解 脱(した)という名の 菩薩が	爾時解脱長者…
善哉 tonḅi urīqa incā tip sözlāmis ärür 善財 童子 (子)へ このように 述べたのである	告善財童子言「…
mān kāntü özüm ontin siḅarqī 「我 自 身 十 方にいる	十方一切世界所
burxanlarnī körāyin tisār mān 諸仏を 見たい といえ(我れ)	有如来我若欲見
ol bulxan maḅa kālmāz mān ol burxanlarqa その 仏は 我れへ来ず 我れ その 諸仏へ	随意即見然彼如
barmaz ärip bu oq orunta 行かずにこの 所で	来不来至此我不
ol burxanlarnī körür mān その 諸仏を 見る(我れ)	往彼…
nātāgin tiptisār 何故かと いうなら	
māniḅ öz köñülüm ärsär suvqa oqḅatī ärür 我れ自身の 心 は 水に 似るものなり	又知自心如器中
burxanlar ärsär ay täñrikä 諸仏 は 月 天に	水悟解諸法如水
oqḅatī ärür tip bilir mān 似るものなり と 知る(我れ)	中影…」(巻第六 687)

suv süzülmäk üzä ay täñri nātäg közünür ärsär öz köñllük suv süzülsär
水が 澄むことによって 月 天が 丁度 現われる ごとく 自分の 心の 水が 澄むなら

burxanlarniḅ kölgäsi süzük köñüllük suvqa tüsär tip (8b-5~13)
諸仏の 影身が 澄んだ 心の 水に 映る」と

華嚴經の残る1引用文はいまだその対応箇所を探し得ない。(cf. p. 025)

以上本仏典には首楞嚴經と華嚴經からの引用文がみられるが、八十華嚴と対応するはじめの2つの引用文は、連続する文脈中に無理に挿入された形跡がみられ、ウイグル語の構文自体も他の引用文と多少異っているので (cf. p. 030)、他とは違った条件のもとに引用された可能性が強い。

華嚴經の名称はサンスクリットで *buddhāvataṃsaka, gaṇḅavyūha*

という2種が存在するが、本仏典では /padmalaṅkar/ (<skr. *padmālaṅkāra* 「蓮華莊嚴」) の形式が使用されている。この名称は羽田博士の翻訳された断簡中にも現われるが、博士はこれについて「本来の梵名が伝わっていなかったので漢名に基いてかかる名称をつけたのかと思うが、しかしまたもともとかかる名称も行われていたかも知れず、今は何れとも断定し難い」と述べておられる⁽¹⁷⁾。しかしこの写本の別の仏典中に *buda avatansaka* (<skr. *buddha-avatamsaka*) という名称がみられるので (27b-1)、ウイグルにこの二種の名称が使用されていたことは明らかである。なお、このウイグル語の /padmalaṅkar/ はナルタン版チベット大蔵経の目録にある *padma'i rgyan* (蓮華莊嚴) に相当すると考えられる⁽¹⁸⁾。

(2)内容

対照とする原典のみつかっていない現在、本仏典の内容を明確に把握し記述することは困難である。従ってここでは本仏典の内容の構成法と若干の訳述例を掲げることによって内容の説明としたい。

本仏典は「心性を説く法」という題名のもとに一貫した内容を表現しているが、その内容はまたいくつかの部分に分けて構成されている。一般に句読点とよばれるマーク「・:・」が本仏典にも存在するが、巻頭文と奥書を除いた箇所ではこのマークによって内容が分割されているといえる。

- | | | | | | |
|---|-------------|-----|---|---------------|-----|
| A | 2a-2~6b-2 | ・:・ | C | 11b-12~16a-9 | ・:・ |
| B | 6b-2~11b-11 | ・:・ | D | 16a-10~16b-13 | ・:・ |

A

この部の内容は 大雑把に「心及び心性についての概説」ということができる。次に掲げる訳述文はこの部の冒頭部分であるが、その内容をよく示していると思える。

tüz	kärsär	män	käntü	özüm	alqu	partakčanlar	tüzülär	könüllüg	
導く	なら	我れ	目	身を	一切	凡夫を	善人を	有心	
könülsüztä	ulatılar	alqu	nomlar	alqu	baréa	könültin	tu7ar	arıp	yanturu
無心	などき、	一切	法は	普く	心より	生	じ	帰して	
könülkä	tayanip	turdaçı	ärürlär	inécä	qaltı	suvtaqı	qabarma	suvtä	
心へ	依って	いるもの	なり、	たとえば	水にある	大波が	水より		

törür ärip yanturu suvqa tayanıp turmıs tåg ärür bu köñül alqu
 現われ 帰して 水に 依って いる ごとなり。この 心が 一切
 nomlarqa töz bolmaqıntın bu oq köñülni yañılsar 无明 üzä örtülüp 東
 法へ 性と なることから この 心を 迷うなら 无明 に 被われ
 azta ulatı nizvanılarıñ küélantürüp…… bu oq 心 -ni tuysar tözinäcä 洋
 色欲 などの 煩惱を 強くし この 心 を 悟るなら 性として
 bulup 智 üzä yarutup süzölmäktä ulatı ädgü nomlar üzä adruyu 学
 得て 智 に 輝き 清淨 など 善 法などにおいて 弁別して
 barıp…… näcä yañılmaq üzä partakcän bolup tuymaq üzä tüzün 報
 行き いかにか 迷いに おいて 凡夫と なり 悟りに おいて 善人と
 bolsar yämä tözki tuymaqsız 心 töziñä qayı iläniştürsär yañılmaqlı
 なっても 性にある 不生の 心 性を 注視し 取り合うなら(?) 迷いと
 tuymaqlı iki törlüg nomlı birgärü köñülnüñ köligäsi ärür (2a-2~
 悟りと 2 種の 法は 共に 心の 影 なり。
 2b-1)

また、このAの部は次のような文によって終結している。

burxanlar bağsılar tuymadıq tınlağlarnı bu 心 -ni tuydurğali üküś
 諸仏 諸師が 悟らない 衆生の この心 を 悟らせるために 多
 tälim nomlar nomlasar yämä tüplüg yüdintin kök qalıqıñ körmıs tåg
 量の法を (22) 説いても 小 穴から 虚 空を 見たごとし。
 qavırısınca 三 törlüg qapıñ üzä uqıtu birälim munı körüp öz 心 -ni
 簡略に 三種 門 によって説き 与えよう、これを見て 自心 を
 cınğarzunlar ∴ (6a-12~6b-2)
 精進すべし

B

この部はAの終わりで述べられた「(心性を説く)三種門」について解説されたものである。

qayu ärür 三 tip tisär 一者 alqu nomlar 心 -tin öñi ärmäz tip uqıtur
 三(種門)がどこにある といえは 一つは 一切 法は 心 より 他に なし と 説く。
 ikinti uzık aksar igid saqınc budluğ bälğülüg nomlar birlä qatışlıñ
 第2は 文字 戲 論は 明らかな 法 と 混淆するものに
 ärmäz ärtükün uqıtur ücünä itmäk yaratmaq üzä ärmädin ilki tözlüg
 あらず ということを説く。 第3は 為 作 によって ではなく 本来の性としての
 täprämäksız tözin uqıtur (6b-2~6)
 不動の 性を説く。

以下この「三種門」が次のような順序で説かれているのである。

第一種 6b-2~9a-2 ∴ 第三種 10b-1~11b-11 ∴

第二種 9a-2~10b-1 ∴

C

この部の冒頭は次のような文に始まっている。

bu 三 bölük nomlarta baştınqı bölük ärsär yügärü turdaçı 心 -li
この 三 部 法のうち 最初の 部 は 上に立つ 心 と

atqanʔulini töpükkinčä töz quruʔ ärtükin uqtıp ol tözinčä yaratın-
境とを 畢竟じて 性 空 なることを 説き、その 性として 支配する

durtaçı 心 ärür ikinti bölük ärsär savlı saqınçlı ilkitinbärü 心 birlä
ものは 心 なり。第2 部 は 言と 考慮とは 本来 心 と共に

yaratılmamışın uqtıp yanluq atqarʔta turʔurmadaçı ärür üçünč bölük
為作されたものでない と説き、 迷いの 所縁に 上らせないもの なり。第3部

ärsär ilkitinbärü tolu bütmiş itmäk üzä bolur ärmäz öztäki çin 心
は 本来 完全に 円満なるものは 為作によって なるもの ではない、自身の 真 心

-ni simäksiz üzä tuyturdaçı ärür bu 三 törlüg nomlar alqu barča
を 無為(?)によって 悟らせるもの なり。この 三 種 法は 須らく

tanuqlarʔuluq nom ärsär yämä bu t(a)rqi uqmaq ärür çin kirtü
証得すべき 法 なれども この 計度を 理解しているものは 真 実

tuymiş ärmäz bularni uqup atqarʔi kidip izi uruyi qalmadin tözinčä
悟ったものにあらず。これらを 理解し 所縁が 滅し 痕 跡が 残らず 性として

işsiz täprämäksiz tursar timin tuymiş bolur (11b-12~12a-9)
不作用 不動に 立つなら 即わち 悟り となる。

すなわち、ここではBの「三種門」を「三部の法」「三種の法」にお
きかえてその内容を確認し、更にこれを正しく「理解」し「悟り」を得
ることについて述べられている。

またこのCの部の 14b-2 まではその間の内容をまとめたと思われる
2つの要約文が掲げられている。

qavirasınca tutsar tildaʔtin tüskä tägi alqu barča 心 -nün tözi
要約 すれば 因から 果に まで 一切は 心 の 性、

könjünün işi ärür (13a-6~7)
心の作用なり。

qavirasınca sözläsär 心 tözin uqup 心 tözin tuyunsar könjülsüz ärip
要約して 述べるなら 心 性を 理解し 心 性を 悟るなら 無心となり

alqu ädgü nomlar alqu barča tuʔar (14b-11)
一切 善 法は 普く 生る。

更に 14b-12 以後は「法の継承の仕方」について説明されている。

bulxanlar nomlap qodmiş baʔsilarniñ ulamış yanlar ärsär täk
諸仏が説き 下した 諸師の 継承した 方法 は ただ

uqmaq üzä saqınmaq üzä täggülük ärmäz olarni täk işläsär timin ök
理解によって 考慮 によって 到達すべきものにあらず。それらを ただ 為すなら 即わち

ol ädgü(lär)kä täggäli bolur (14b-12~15a-3)
それが 善人に 到達し 得る。

anın bodi 心 uqıttaçı nomta incä tip yarlıqamış ärür bütmadük
それを 菩提 心を 説く 法で このように 説いたのである 「成就していない

baʃsilarniñ yörügi ärsär qorʃurmaqlıylarnıñ nomı ärür tayanʃuluq
諸師の 説 は 放逸の 法 なり、 依るべき

yolnı yañilturur igit saqinéc üzä biltürür altun bişurdaçı simiq ot
道を 迷わせる 戯 論 において 教える、 金を 精錬する 小枝 (の草)の

täg baʃsilarqa üküš ärdinilär üzä tapınmıš udunmıš kargak tip ∴∴
ごとく 諸師を 多量の 宝 として 崇拜 せねばならない」と、

(16a-4~9)

D

この部は「結語」を表現したものと考えられる。

padmal(a)ñkar sudurta incä tip yarlıqamıš ärür üküš kalplarta
華嚴 經に このように 説いた のである 「多 劫に

qatıylanıp tavraniş bu saqinʃalı sözlägäli bolmaʃuluqluʃ 心 tigli
精進し 善行をなし これを 思議することが 言うことが できない 心 という

nom qapıʃıʃ isidmäsär cin kirtü ʃı atanmaz burxan nomınta yämä
法 門を 聞かないなら 真 実の 菩薩とよばれない、 仏 法に また

tuʃʃalı bolmaz tip 心 uqıttaçı töz nom ärsär toornuñ ög yipları ärür
生れることができない」と、心を 説く 性 法 は 網の 母 紐 となり、

adin nom 門 -ları ärsär toornuñ köznäkin täg ärür toornuñ ög yipi
他 法 門 など は 網の 目の ごとくなり、 網の 母 紐を

bulmamaq üzä köznäkläri yumʃı tonup toornuñ ög yipin karmäk üzä
見つけないことによって 目は 全て 閉じ 網の 母 紐を 伸ばすことによって

alqu köznäklär nätäg açılır ärsär anıcalayu yämä alqu nom qapıʃlar
一切の 目は 丁度 開く ごとく このように また 一切 法 門を

bulup 心 töziñä tayanmasar ol nom qapıʃları barça açuʃ ärmäz bolur
見つけ 心 性に 依らないなら その 法 門は 全て 不 開と なる、

心 töziñä tayansar alqu nom qapıʃları alqu barça açılır anı ücün
心 性に 依るなら 一切 法 門は 普 く 開く、 その ため

ötünür män alqu tüzünlär 心 töziñä tayanzunlar incä qaltı bädiztäki
願う (我れ) 一切 善人は 心 性に 依るべし、 たとえば 絵に描いた

as açqa nätäg tusu bolmasar ögüztäki suv timäk üzä usmaq nätäg
食物が 空腹に 丁度 役立たないように 川にある 水 ということによって 渴きが 丁度

qanmasar adınların ärdinisiz sanamaq üzä öziñä nätäg yuqmasar
満たないように 他人の 宝なきを 思うこと によって 自らに 丁度関わりのないように

anıcalayu yäm änom tip körmäk üzä ädgükä tägmäz nom tip 言 üzä
このように また 法 と言ってみることによって 善へ 到らず、 法 と言うことにおいて

tüzün yolqa 入 umaz nom tip sanamaq üzä tüsin tanuqlaʃalı umazlar
善道に 入り得ず、 法 と 考えることによって果を 証得し 得ず、

anı ücün ötünür män bişrunzunlar qatıʃlanzunlar bişrunzunlar qatıʃ-
その ため 願う (我れ) 成就すべし 精進すべし 成就すべし 精進

lanzunlar ∴∴ (16a-10~16b-13)
すべし。

この文の後に奥書がつづくのである。

(3) 言語面での特徴

本仏典はいわゆる後期ウイグル語で書かれたものであり、その言語特徴は何れ詳細にしたいが、その作業は本写本の残りの部分あるいはこの時代に書かれた別の写本をも含めて行う必要がある。ここでは若干の正書法の特徴以外はむしろ翻訳仏典としての特徴に関して特に仏教用語と特異な構文について記述してみたい。

音素は本仏典の文字体系から、古代及び中期チュルク語の資料を参考にして決定した。

1. 正書法

音素 /a/ は語頭に立つとき文字 A で表記されるが、/aCCV…/ の音素連続からなる若干の語幹では /a/ は /ä/ を示すのに用いられる文字 Ä によって表記される。/amrīl-/ÄMRYL- 「平穩になる」(2b-9)/akśar/ÄĜŚ'R 「文字」(6a-10) /altun/ ÄLTUN 「金」(10b-11) /arkan/ÄRG'N 「阿羅漢」(10b-7)

音素 /ü/(/ö/) は語頭の /y/ に接続する場合には文字 Ü のかわりに /u//o/ を示す文字 U を使用する。また /köñül/ 「心」においても例外的に U が使われる。/yükün-/ YUGUN- 「敬礼する」(2a-1) /yüd/ YUD 「穴」(6a-14), KUNGUL(2a-4)

音素 /n/ は普通は無点の N が用いられるが時々有点の Ñ も現われる。/yantur-/ Y'NTUR- 「帰る」(2a-3) Y'NTUR- (2a-5) /-nüñ/ -ÑUNG (genitive 12a-10) /ün/ ÜÑ 「音」(9a-8) UN(5b-5)

音素 /q/ は普通は /r/ を表わす文字 Ğ によって表記されるが、ときには Ğ に 2 点を加えた文字 Q によっても表記される。/qaltı/ Ğ'LDY 「若し」(2b-2) Q'LTY (6b-13) /uqup/ UĜUB 「知って」(8a-10) UQUB(8a-12) /qalıq/ Ğ'LYĜ 「空」(7b-8)

音素 /s/ は大部分は /s/ を示す文字 S で表わされるが、S に 2 点を加えた Ś によっても表記される。/is/ IS 「仕事」(12a-11) /biś/ BYŚ- 「熟する」(13a-1) BYŚ-(12b-13)

音素 /t/ は語中では文字 T の他に D によっても表記される。/yirtinćü/ YYRDYNCU 「世界」(9a-10) YR-TYNCU(2b-14 3a-1) /ilkitinbärü/ ILGYDYNB'RU 「最初以来」(10b-6) ILGY-TYNB'RU(12a-3) /ulati/ UL'DY 「…など」(2a-3) UL'TY(2a-10)

音素 /v/ は文字 V で表記されるが、語中では /y/ を示す文字 Y と区別

できない。また /v/ は文字Uによっても表記される。/vidyi/ UYDYYY
「明」(10b-6)

音素 /z/ は語中では文字Sを用いるが、語末のZを利用して離し書き
によって表記する場合もある。/közüñü/ GÜSUNGU「鏡」(3b-8)
/közüñ-/ GÜSUN-「現われる」(7a-6) GÜZ-UN-(7a-4)

音素 /ž/ は文字Sで表わされるが、語末のZの右傍に1点を付した文字
Žによっても表記される。/užik/ USYG「文字」(9a-7) UŽ-YG(9a-
2)

音素 /ts/ は文字TとSの組み合わせによって表記される。この音素は
漢語の「子」や「珠」に含まれる子音を表わすのに用いられる。/qaytsi/
Ġ'YTSY「骸子」(5a-8) /suntsi/ ŠUNṬSY「青珠」(5a-13)⁽²⁴⁾

2. 仏教用語

ウイグル語には特にサンスクリットからの借用語が仏教用語として多
数定着している。漢語から翻訳されたと推定される本仏典にも多くのサ
ンスクリットの借用語がみられる。/partakčan/「凡夫」(2a-2) < *pr*
thagjana /paramit/「波羅密」(14a-8) < *pāramitā* /sansar/「輪廻」
< *saṃsāra* /kalp/「劫」(16a-10) < *kalpa* /t(a) rqi/「計度」(12a-7)
< *tarka* /g(a)r(a)x/「執曜」(4b-9) < *graha* /anant/「阿難」(3b-7) < *āna*
nda /yatiadati/「演若達多」(3b-7) < *yajñadatta* /śiravast/「室羅城」
(3b-7) < *śrāvastī* etc. その他にソグド語や漢語からの借用語もみられ
る。/nizvani/「煩惱」(2a-7) < *sogd. nyzB'ny* /qaytsi/「骸子」(5a-8)
etc.

仏教用語には借用語以外にウイグル語に翻訳された単語が定着した場
合もある。/tüzün/「善人」(2b-11)/atqar/⁽²⁵⁾「所縁」(12a-4) /tildar ba-
sudči/⁽²⁶⁾「因縁」(5b-11) /tildar orun/「因所」(13a-14) /ozmaq qutrul-
maq/「解脱」(14b-9)etc.

次の例はサンスクリットとウイグル語の複合形式である。/čakravart-
qan/「轉輪王」(10b-8): *skr. cakravartī-rāja*

また、セットとして用いられる仏教用語にはウイグル語のみを用いる
場合と借用語を混用する場合とがみられる。『六境』…/ön/「色」/ün/
「声」/yid/「香」/tatiṛ/「味」/böridik/「触」/nom/「法」(5b-5), 『六
波羅密』/puši paramit/「布施波羅密」< *chin. 布施* /č(a)qšaput-/「持
戒(?)」< *skr. śikṣapada* /särinmäk-/「忍辱」/qatiṛlanmaq/「精

進-]/dian-/「禅定-」<skr. *dhyāna*/bilgä bilig-/「智慧-」(14a-2~12), 『十趣』/burxan/「仏」<chin. 佛(?) 并「菩薩」/pirtikbut/「独覺」<skr. *pratyekabuddha*/širavak/「声聞」<skr. *śrāvaka*/täñri/「天」/yalñuq/「人」/asuri/「阿修羅」<skr. *asura*/tamu/「地獄」<sogd. *tmw*/pirit/「餓鬼」<skr. *preta*/yilqi/「畜生」(6b-13~7a-2)

若干の仏教用語はウイグル語と借用語が重複あるいは併用されているが、これらの単語はウイグル語としても借用語としても十分定着していなかった疑いもある。/piratä bilgä bilig/「智」(skr. *prajñā* + uig. 14a-12) /tonzi uri/「童子」(a. chin. .d'ung⁽²⁸⁾ + uig. 8b-5) /tuʔmaz arkan/「不生」(uig. + sk. *arhan* 10b-3) /quruʔ yaruʔ/「空明」~/quruʔ vidyi/ (uig. skr. *vidyā* 10b-8, 10b-6)

一方本仏典には漢字で書かれた漢語が多数みられる。しかし、これらの単語は後接された接尾辞母音の母音調和から判断すると、実際にはウイグル語として発音されていたと推定できる。心 -lüg (6b-9) 心 -süz (6b-9) 心 -nüq (12a-9) 心 =/köñül/

だが、例外として「善財(童子)」に該当する「善哉」(8b-5)は漢音で読まれたものと考えられる。

漢字で書かれた漢語には「无明」(2b-6)「定」(2a-11)「三宝」(2a-1)「大小」(6b-10)などのように単独で現われる場合もあるが、多くはウイグル語あるいはサンスクリットからの借用語と併用されている。心(2a-9)~/köñül/(2a-6) 六境(5b-7)~/altı atqanʔu/ (5b-6) 十方世界(12a-13)~/ontun siñar yirtinü/ (12b-5) 門(16a-14)~/qapıʔ/ (16a-12) 世尊(4a-1)~/täginmäz täñri/(4a-3) 色(5b-1)~/ön/(5b-5) 鏡(7a-5)~/közüñü/(3b-8) 智(2a-10)~/bilgä bilig/(14a-12) 時(4a-7)~/öd/(3a-2) 佛, 仏(3a-5, 3b-14)~/burxan/(8b-7) 善哉~/sadu/(16b-5) 并(3a-4)~/bodis(a)t(a)v/(5b-8)

また、次のような併用例からは、仏典読者に漢語とウイグル語の対応関係を示そうとした翻訳者の意図が伺える。

…………… 心 -li atqanʔu-li …………… köñül-li atqanʔu-li ……………
心 -li 境 -li 「心と境と」(5b-9~6a-2)

若干の単語はウイグル語との複合形式をとる。六 yol「六道」(2a-8) 心 töz-i「心性」(2a-14) nom 門「法門」(16a-14) ontun siñar 世界「十方世界」(12a-11)

以上、本仏典には漢字による漢語が多数みられるが、そのほとんどは翻訳者の気紛れによって書かれたと考えられる。一方 /könül/ /bodis(a) t(a)v/ /burxan/ のように頻度の高い単語あるいはウイグル文字で長く綴る単語は漢字を使用することによって記号化されたとも考えられる。しかし、この漢語原典の影響によると思える漢字の使用は、我々にとってはウイグル語の仏教用語を明確に認識できる意味で好都合である。

3. 構文

本仏典のウイグル文には仏教用語として用いられる名詞以外にも漢字による副詞や動詞によって構文が形成されることがある。

incä qaltı ootnuñ bodi suv nätäg ärmäsär 如是 yämä 心 tözi bitig
たとえば 火の 形が 水のごとくでないように このようにまた 心 性は 書
uzük tözlük ärmäz (6a-9~10)
字の 性 ではない

incä qaltı kök qalıq taqı bulit kök qalıqta türüp kök qalıqta anca
たとえば 虚 空 にある 雲が 虚 空に 現われ、 虚 空に そのよ
qia turup ol oq kök qalıqta kidip kidmis oruni qalmasin yiltizi nätäg
うに 留まり、 その 虚 空に 滅し、 滅した 所が 残らず、 根が 丁度
yoq ärsär 如是 yämä 心 täki igit saqinclar könültin tuɣar (7b-7~
ない ように このようにまた 心 にある 戲 論は 心から 生ずる
11)

この「如是」はウイグル語の /ançulayu/ に該当する。

incä qaltı yirkä tüsmis kişi qayu yirkä tüssä ol oq yirkä tayanıp
たとえば 地に 落ちた 人が どこかの地に 落ちたら その 地に 依って
turup adın yirkä tayanıp nätäg turur ärmäsär ançulayu yämä tinlaɣlar
留まりながら 他の 地を 依って 丁度 常で ないように このように また 衆生は
ol oq könülni yañlip sansarta tägzinmis ärürlär (5a-1~5)
その 心を 迷い 輪廻を 巡るもの なり

また、この “incä qaltı……(nätäg)……sar/sär ançulayu yämä……”
という構文は漢文の「譬如……如是亦……」に相当すると考えられる。

nom tip 言 üzä tüzün yolqa 入 umaz (16b-11)
法 と 言うことによって善 道に入り得ず、

ançulayu yämä 進 tänrilär 仏 -larnin baɣşilarnıñ özlärniñ tanuqla-
このように また 進むなら世尊 仏 の 師の 自身の 証得し
mişin… (15a-11~12)
たものを

上の2文の「言」「入」「進」はそれぞれウイグル語では /timäk/
「いうこと」/kirgäli/「入り(得ず)」、/yorisar/「進むなら」である。

本仏典には漢文構文の影響によってウイグル語本来の語順が破壊され

た若干の例がみられる。

bolmaz bir yämä nom nom töziñä kirdäci (9a-12)
ならず 一つの また 法は 法 性に 入るものと

漢文「未曾有一法得入於法性」

töz quru? bolmaqı ol oq burxan ärür bolmaz saqın?alı ülgü (l) ä-
性 空 なることは それは 仏 なり できず 思 量する
 gäli (10a-7~8)
こと

漢文「性空即是仏不可得思量」

bu tirir ikinti uzük aksar igit saqın? bud bälgülüg nomlar birlä
これか言う、第2の 文字 戲 論は 明らかな 法 と

qatışlı? ärmaz ärtükün uqutmaq (10a-12~10b-1)
混淆 するものにあらずということを読むこと

bu titir üçün? itmäk yaratmaq üzä ärmätin ilki tözlük täprämaksiz
これが言う、第3の 為 作 によって でなく 本来 性としての 不動の

tözün uqutmaq (11b-10~11)
性を 説くこと

/titir/ は /tit-/「いう」に aorist 接尾辞のついた形式であるが、ここでは「則」あるいは「所謂」に該当させることもできる。

qayu ärür 三 tip tisär 一者 alqu nomlar 心 -tin öñi ärmaz tip
どこに ある 三 と いうなら、一は 一切 法は 心 より 他に なし と

(6b-2~3)

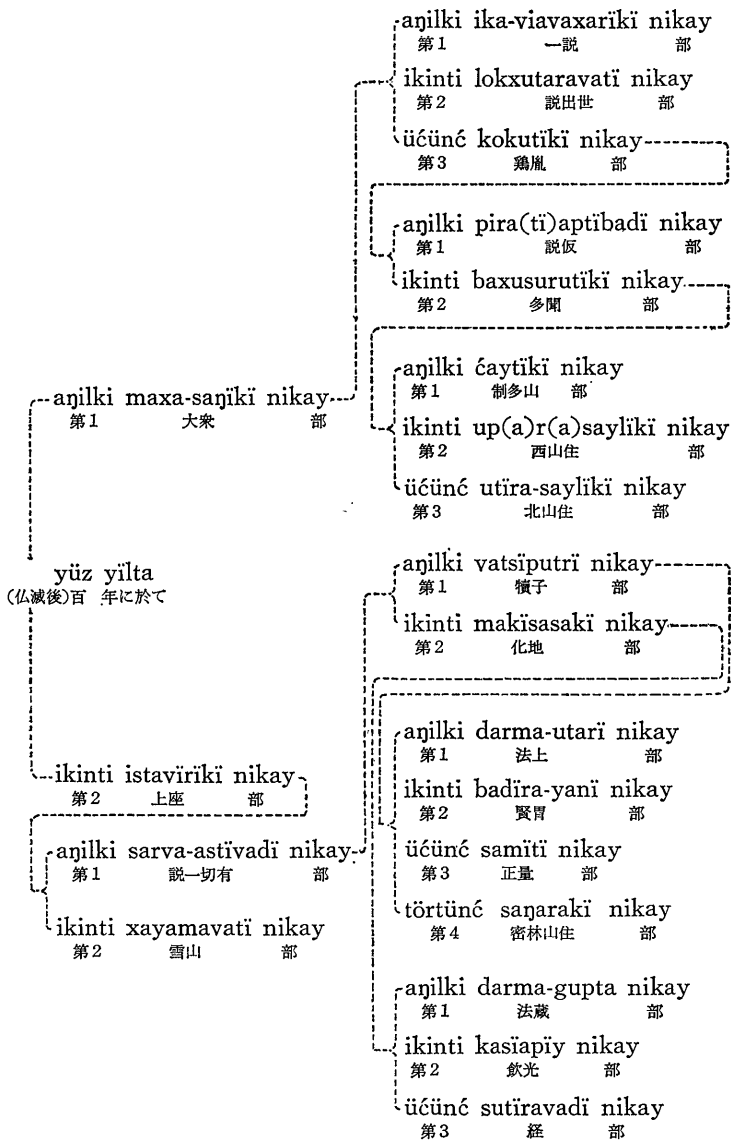
「者」は漢語の繫辞と考えられる。

以上の他、本仏典では逆接の条件文を常に“-sar/sär yämä”で表現しているが、これも本仏典のウイグル語の特徴の1つといえる。

II

本写本の最後の2ページにはウイグル語の単語で結んだ系統樹のごとき図が描かれている。この図は本写本の他の部分とは無関係に描かれたものであり、筆者はこれは小乗経内の部派分裂の系統を図示したものであるとわかった。今までウイグル語の仏典で部派を扱ったものは知られていない。⁽³⁰⁾

部派分裂には諸説が伝えられているが、ここに描かれたウイグル所伝のものとの内容の一致するものはほかにみつからなかった。しかし、この図の示すところは、部派数が総計21ある点、及び分裂順位の類似する点からみて「異部宗輪論」あるいは「十八部論」にその内容が最も近いといえる。⁽³¹⁾



このウイグル所伝の部派分裂図がどういう経路を経てウイグルに導入されたか、あるいはもともとこのような図の形で伝来したのかは今のところわからない。しかし、各部派の名称がサンスクリットからの借用語を使用していることから推定して、直接サンスクリット原典から伝来した可能性も考えられる。

また、この図に描かれた点線には若干の修正された痕跡がみられるが明確なところはわからない。

/maxa-saṅgiki/ <skr. mahāsaṅghika /istavīriki/ <sthāvīraka /sarva-astivadi/ <sarvāstivādin /xaymavati/ <haimavata /ikaviavaxariki/ <ekavyavahārika /lokkutaravati/ <lokottaravādin /kokutiki/ <kaukku⁽³²⁾ṭika /piratiaptibadi/ <praññaptivādin /baxusurutiki/ <bahuśrutīya? /čaytiki/ <caitika /up(a)r(a) sayliki/ <aparaśailaka /utira-sayliki/ <uttaraśailaka /vatsiṣputri/ <vātsiṣputrīya /makisasaki/ <mahīśāsaka /darma-utari/ <dharma-uttara /badīra-yanī/ <bhadrayānīya /samīti/ <saṃmatīya /saṅaraki/ <saṅṅarika /darma-gupta/ <dharma-gupta /kaśiapiy/ <kāśyapīya /sutiravadi/ sautravādin

また /nikay/ は skr. *nikāya* 「部」からの借用語である。

(京都大学文学部助手)

註

- (1) 体裁に関しては Stein の “*Serindia*” vol. II (1921 Oxford) p. 925 に詳しい。なおそこの番号は Ch. xxvii-002 である。
- (2) “*Eski Türk Şiiri*” (Ankara) pp. 63-161
- (3) 筆者はテキストとして京都大学東洋史研究室に収められている写真本を使用した。これには 36b~37b が欠けている。しかしこの部分は Rahmeti も扱っていないので恐らく写真にとれない状態であろう。
- (4) この冒頭文と同じものが lb の右端にも書かれているが、「三宝」に対して プラーフミー文字で縦に「'3'-ra-tna (skr. *tri-ratna*)」と書かれている。
- (5) Rahmeti もこの人名にふれているが、彼は vapsī と読んでいる。しかし筆者の用いた写真本では最後の文字は U としか読めない。なお、もし vapsī なら「法師」を音写したことになる。
- (6) cf. vapsī <法師 A.v. Gabain ‘Briefe der uigurischen Hüen-tsang-Biographie’ SPAW (1935) p. 414, komso <含藏 A.v. Gabain und G.R. Rachmati ‘Turkische’ Turfantexte’ VI SPAW (1934) p. 149. また、この so は「成」に該当させられるかもしれない、「法成」は敦煌仏教界で活躍し

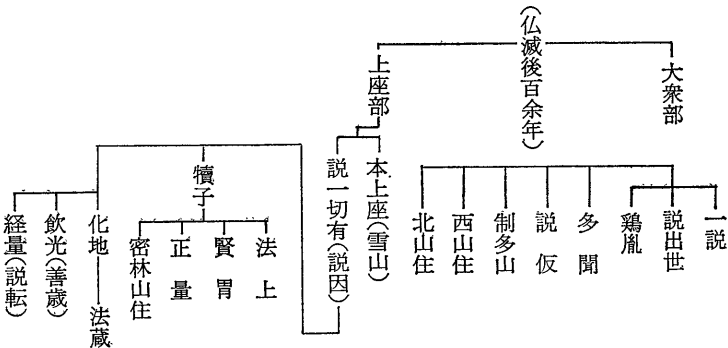
た人物である。

- (7) たとえば対格語尾 /-r/-g/, /-in/-in/ (1, 2 pers. sing. acc.) にかわって /-ni///-ni/ が多数使用されているが、後期ウイグル語の特徴の1つといえる。
/közünü-ni/ 「鏡を」(3b-8) /baš-im-ni/ 「我が頭を」(3b-2)
- (8) cf. 拙稿「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212 (109) について」『東洋学報』第56巻1号(1974) pp.044-057
- (9) この文字を小田寿典氏はチベット文字として「legs-so (善哉)」と読まれたが、筆者はむしろこの文字は註(4)と同じくウイグル語で使用されたプラーフミー文字を縦に「sā-dhu」と綴ってサンスクリットの *sādhu* 「善哉」を表記したものと決定したい。小田寿典「ウイグル文殊師利成就法の断片一葉」『東洋史研究』第33巻第1号(1974) p. 98
- (10) 『大正新修大藏経』第19巻「密教部二」「仏告富樓那汝雖除疑余感未盡吾以世界現前諸事今復問汝汝豈不聞室羅城中演若達多忽於晨朝以鏡照面愛鏡中頭眉目可見瞋責己頭不見面目以為魍魅無狀狂走於意云何此人何因無故狂走」(121のb)
- 「仏告阿難即如城中演若達多狂性因緣若得滅除則不狂性自然而出因緣自然理窮於是阿難演若達多頭本自然本自其然無然非自何因緣故怖頭狂走若自然頭因緣故狂何不自自然因緣故失本頭不失狂妄出曾無變易何藉因緣本狂自然本有狂怖未狂之際在何所潛不在自然頭本無妄何為狂走若悟本頭識知狂走因緣自然俱為戲論」(121のc)
- (11) cf. mong. *seri-* “to swaken, to become sober” osm. *serin* “cool”
- (12) /yoqla-/ は /yoq/ 「無」 + /la-/ (動詞形成接尾辞)
- (13) 羽田亨「トルコ文華嚴經の断簡」『羽田博士史学論文集』下(1958) pp. 183-205, 下石浜純太郎「回鶻文普賢行願品残卷」『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』(1950) pp. 63-73
- (14) 『大正新修大藏経』第10巻「華嚴部下」
- (15) テキストでは ULGU”G’LY となっているが、この5つ目の文字’はLの誤りと考えられる。
- (16) 註(14)に同じ。
- (17) 註(13)羽田亨 pp. 201-202
- (18) 桜部建氏はこの *padma’i rgyan* が「*gaṇḍavyūha*」とも結びつけて解し得ないであろうかとも考えると述べておられるが、ここでは八十華嚴にもこの名称が用いられている。「華嚴という語について」『大谷学報』第49巻1号(1969) p. 34
- (19) /qabar-/ 「吹き上げる」+ /ma/ (名詞形成接尾辞) osm. *kabarma* 「大波」、なおこのあたりの文章は仏典中でよくみられる。「譬如海波波浪是則無差別諸

識心如是」（「大乘入楞伽經」卷二）「心是万法体万法是心用法不離心即波是水」
 （「万法帰心録」巻上）

ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212-108 に記して

- (20) /töz/ は普通は「根，基」と訳されるが，ここでは /nom töz-i/ が漢語「法性」に該当していることから「性」と訳した (cf. p. 020)
- (21) この単語は Ġ'YYYL' NYSTURS'R と綴られているが， /qay-i/ と /ilän-is-tür-sär/ の 2 語が結合したものと考えられる。ilin-“to catch oneself on”
- (22) /qavīra/+ /sīnča/ (3 人称単数到格)， /qavīra/ .Or. 8212-75A/75B (「阿毗達磨俱舍論実義疏」) 中では漢語の「略」に当てられている。
- (23) /töpü/「頂」+ /k/ (動詞形成接尾辞)+ /kinča/ (副動詞形成接尾辞)
- (24) 漢語「青」と /sun/ の間には音声上の隔たりが大きい。しかしこの単語の前に漢語「大」がついていることから，「これを「大青珠skr. mahānila」に相当するものと考えたい。
- (25) 上掲「阿毗達磨…」中に「所縁之外 ADĠ'ĠYND' T'S」とある。
- (26) 註(25)と同じく「其慧作所縁縁故 BYLG' BYLYG G' ADĠ'Ġ ATLĠ B'SUDCY BULUR UCÜN」
- (27) 卍は「菩薩」の略字である。
- (28) B. Karlgren “Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese” (1923 Paris) p. 325, 310
- (29) 「智度論三」に「阿名不。羅漢名生。後世中更不生是名阿羅漢。」織田得能『仏教大辞典』(1917) p. 1524
- (30) 但し，註(6)の Gabain の中には「siošing säkiz ygrmi nikai」即わち「小乘十八部」の名がみられる。
- (31) 「異部宗輪論」の部派分裂は次のごとくである。但し，寺本婉雅・平松友嗣共編『藏漢和三訳対校異部宗輪論』(1974 再版) の附録として掲げられた「西藏所伝異部分派表」を参照した。



(32) BYR'B'YY'BDYB'DY と綴られているが、中間の4文字 -B'YY は -DY- あるいは -TY- の誤りと考えられる。